
24th Summer Breeze

小松絵美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

24th Summer Breeze

【Nコード】

N3600D

【作者名】

小松絵美

【あらすじ】

別れた恋人が忘れられないサーファーRIEは、メールアドレスを変えて自分だとわからないように、彼に一方通行のメールを送る。そんなある日、RIEの元にも見知らぬサーファーからの一方通行のメールが送られてくるが、その内容はRIEが別れた恋人に送ったものと同じだった。いったい、このメールの送り主は・・・

第1話 私からのメール？

もう、あれから何年経ったのだろう。

あれからというのは、ケンジが夢をあきらめた夏。

そして、ケンジが波をおりた夏。

ケンジとの恋が終わりを告げてから、ずいぶんと時が経ってしまった。

「さよなら」を告げたのは私の方だった。

プロサーファーになる夢を追いかけて、湘南に移住してから6年が経ったころだった。

今、振り返ってみても、あんなに傷つけ合い、でもあんなに愛した人には

もうめぐり合えないだろうと思う。

別れてからもずっと、ケンジのことを愛している私がいることを、ケンジは知らない。

私は、自分でも（なんてネクラなことを・・・）と思いながらも、年に1度だけは、ケンジの携帯に電話をしていた。

「はい」というケンジの声を聞いて、携帯番号があのと変わっていない

ことを確認した。

私は、そのたびにわざわざ携帯を非通知設定にしていた。

ケンジの声。変わらないちよつとぶつきらばうな投げやりな感じのする声。

私が、さよならを告げてからも変わらないケンジへの想い、そして、

ケンジにも

そうであって欲しいという願いが、ケンジの携帯番号が変わらないことを

自分なりに確認して、安心していたのかもしれない。

私は、自分のメールアドレスを変えた。

ケンジと別れてから。

そして、これもまた年に1度くらいケンジにメールを送っていた。

「最近調子はどうですか？今週は伊豆の大浜あたりにいい波がきそつだよ！」

波乗りをやめてしまったケンジには、どうでもいいメールだった。

おまけに知らないメールアドレスだ。

文章からいって、サーファーだと察しがつく。

でも、まさか私からだとは思わないだろう。

ケンジの知っている私のメールアドレスは「rie.lani.always.you」。

そして、私の今のメールアドレスは「always.wide.open.hawaii.nalu」だった。

英語とハワイ語をミックスさせて作ったアドレス。

男のものか女のものかもわからない。

でも、きつとサーファーだろうと思わせるようなアドレス。

それだけで、知らない人からのメールでも気味悪さは半減していることだろう。

勝手にそう思っていた。

こんなことを続けて、私はどうしたいというのだろう。

共通の友達から何気なく聞いた話だが、ずっとケンジは私の話や海の話になると

ブルーな感じになるらしい。

いつそのこと、誰だかわからない私からのメールで、「メル友」と

いうだけで

楽しんでくれたらなんて思ってしまう。

それが私だと知ったときは、ますます取り返しのつかないことになりそうだが。

私だったらどうだろう。

見ず知らずの人からのメール。

男か女かもわからない正体不明の送り主。

でも、「サーフィン」という共通の話題があったら、メールの上だけでも

楽しんでしまいかも知れない。

絶対に会うことがないからという安心感から、何を書いてもいいという自由な

メール。自分をかなり良く見せることもできれば、お互いが知らない人だから

こそ、核心にせまった話もできるかもしれない。

ふとした瞬間に、ケンジがまだ私のことを引きずっているというところが聞きた

いのかもしれない。いや、うらんでいるということを知るかもしれない。

でも、私は別れるときに（ケンジの記憶に私がずっと残るなら、うらんでいても

いいから、お願い忘れないで。）と思った。

どっちにしろ、私の知りたいことが聞けるチャンスになるような気がしていた。

金曜日の夜だった。

残業を終えて疲れて帰ってきた私は、そのまま着替えてベッドに倒れこみたい

気分だったが、一週間の疲れをとるべく、バスタブにお湯を入れて

のんびりと

疲れを癒すことにした。

いつもよりかなり長い入浴を終えて、バスタオルをカラダに巻きつけたまま

部屋に戻ると、携帯電話のランプが光っていた。

「1件のメールが届いています」

私はメールを見た。知らないアドレスからだった。

「調子はどう？今週は伊豆の大浜あたりに、いい波がきそうだよ！」
私はメールを読んで全身に鳥肌がたった。

誰？見知らぬアドレス。それに、私がケンジに送ったものとほとんど内容が

一緒だった。

もしかしてケンジ？そんなわけではない。ケンジのアドレスはこれじゃない。

でも、内容からいってサーファーなことは察しがつく。

私はとても怖くなって、そのメールを削除した。

それと同時に、ケンジもきつとこんな気持ちで誰だかわからない、（けれど本当は私が送っている）メールを削除しているのだと思った。

気味が悪いと思いながら。

次の朝、私は目が覚めるとすぐにメールの受信を確認した。

受信メール0件。

やはり、単なるいたずらか？それとも誰かと間違えて送られたメールなのだろうか？

間違えて送られていたなら、きっと送り主も困るだろう。

今週はどこのスポットでサーフィンをするかのメールだったに違いない。

「送り先のアドレス、間違っていますよ」と親切なメールを送ることも、

もう削除してしまった私にはできない。

送り主は相手にメールをスルーされてしまったと思っっているだろう。でも、間違えて送ったのは送り主のほうだ。

別に、私が申し訳ないような気になることもない。

実際、昨晩は怖くて気味が悪くて削除してしまったのだから。

しかし、夜になって、また昨晚と同じようなメールがやってきた。

「どこにする？今週は大浜でいい？メール見たら返事ちょうだい！」

これは、いたずらメールではないのか？

完全にアドレスを間違えて送っている。

私は、同じサーファーとして、仲間と合流できないかもしれないその人を

少しかわいそうに思い、今日は親切心から「アドレス間違えていませんか？」と

メールを返信してみることにした。

「どちらにメールをお送りですか？間違えていませんか？」

ちよつと冷たい感じのする文章だったが、あえてフレンドリーにする必要も

意味もない。私は、それだけを送って返事を待った。

「間違えました！」というメールが届くに達しない。

そして、携帯のメール受信のメロディが鳴った。

開けてみると、「間違えてませんよ！」それだけだった。

そんなわけではない。私は、送り主のアドレスを知らない・・・と思っただけで

私は送り主のアドレスを見てハッとした。

「always-wide-open-hawaii-nalu」

私のアドレスと一緒にだった。違うのは「・」か「-」かだけだった。ということは・・・やはりいたずら？

いや、絶対にいたずらだろう。私は、いたずらだとわかると、やっぱり気味が

悪くなってきた。

どうしよう？返信するべきか？でも、このアドレスでは、相手も私のことを

男か女かわからないだろう。

自分と同じアドレスだから、きっとサーファーに違いないとも思ったか？

でも、それなら何のために？

私は一応、私なりの理由があつてケンジにメールをしていたが、いったいこの人は何がしたいのだろう？

寂しいから？それとも暇つぶし？

私は「あなたはサーファーですか？」と送ってみた。
すると返事はなかった。

次の日は、もちろん私は伊豆には行かず、いつもの茨城のポイントに入った。

そして、夜になってもメールの受信はなく、次の日の朝になってもメールは来ていなかった。

そして、次の日も。またその次の日も。

何か悪いことでもしてしまったのか？それとも怒らせてしまった？そんな訳はない。もとはと言えば、いたずらで送られてきたメールだ。

怒らせてしまったとしても、私は悪くない。

それとも傷つけてしまった？いや、傷つけたとしても私は悪くないだろう。

いきなり勝手に送られてきたのだから。

どこの誰かかもわからないのに・・・

（どこの誰か？）

伊豆に行こうというのだから、「どこ」というのはそんなに遠くはないかも

しれない・・・

その人は、伊豆で友達と会えたのか？

でも、なぜ「間違えていない」などと断言したのだろう？

それとも、私のことを本当に知っている人なのか？

気がつくと、私は誰だかわからない私と同じメールアドレスの人からの

メールを待っていた。

そして次の週末、またメールがやって来た。

「先週、読みどおり、やっぱり大浜よかったよ！今週はどうしよう？寒くなってきたから、そろそろ茨城は無理かもね」

どういふつもりだろう？

先週「サーファーですか？」とメールしたら返事をくれなかったくせに。

私も、このままメールを送るのをやめようか。

そもそも、返事をする意味もない。

私は、意味のないことに一週間も（悪いことしたかな）と思っていたことを

後悔した。ばかばかしい。知らない人相手にメールなんかまともに返して、

どういう人だと思われたか。これでは、出逢い系サイトと何の変わりもない。

すると、またメールが来た。

「もう、メールくれないの？」

いったいこの人は何がしたいのだろう？そのうち会う約束でもしてくるの

だろうか？そんな会ったこともない人にメールで会う約束をするほど、

私は好奇心もなければ暇もない。

私は、相手にするのをやめようと思って、メールを削除しようとした。

すると、またメール受信。

「削除しようとしてるでしょ？会おうなんて言わないから返信してくれる？」

なんなの、この人は。男か女かもお互いわからない。そして年齢も、もちろん

顔も。でも、送られてくる文章は、そのとき私が考えていたことをズバリ的を

得ていた。すると今度は、

「オレはサーファーです。あなたもだよね？」

もちろん返信しなかった。

「今週は鴨川の方へ行こうと思っています。」

「どこの板乗ってるの？Lostの板かなりいいよ！」

「君はレギュラー？」

立て続けにメールが来たけれど、ますます私は返信ができなくなっていた。

返信してしまったら、本当に出会い系サイトのようなものやっっているような

気になってしまいそうだからだ。

サーファーという連帯意識からくる独特の安心感はある。

でも、私が返事をする義務はない。

こんな人からのメールを一週間も待っていたなんて、自分ではかばかしく

なってしまう。

しかし、次に来たメールで私は一瞬にして気持ちが変わった。

「君さぁ・・・RIEでしょう？」

えっ？やっぱり私のこと知っているの？

それなら、あなたは誰なの？

もしかしてケンジ？

そんな訳はない。ケンジは知らない人にこんなメールを送る人ではない。

少なくとも、私の知っているかつてのケンジであれば。

でも、私の胸は高鳴りを抑えることができなかった。

そしてついに私はメールの返事を送った。

「R I Eじゃないです。あなたは誰ですか？自分のことを何も言わないで

失礼じゃないですか？」

嘘だった。私はR I Eだ。心のどこかで、この送り主がケンジであるように

と願った。本当にケンジだった場合、私が私だということを知られていない

方が都合がいい。

「オレが誰だか知リたかったら、週末鴨川のグランドホテル前に来れば

いいよ。そしたら、オレが誰だかわかるから。」

私は一瞬、今週は鴨川で入るか！と思ってしまった。

しかし、すぐそのひらめきを頭から消した。

ばかばかしい。ケンジでないなら別に誰でもいい。

でも、どうして私のことを知っているのだろう？

もしかしたら、本当にケンジ？

私は、真実を確かめるべきか、このままを続けるかで朝まで眠れずに悩んだ。

第2話 二人のケンジ

私は、その週も見知らぬサーファーからメールで指定された場所・
・鴨川グランドホテル前へは行かなかった。

誰だか知りたい・・・本当にケンジだったらと思いながらも、ケンジの性格からいってそれはないだろうという確信があった。

このまま、誰だかわからない人とのメールを続けることは、なんの意味もないことも頭ではわかっている。

けれど、心の奥でどうしても、本当に見知らぬ人だとは思えなかった。

私と同じメールアドレス。私の名前まで知っている。

気がつくと、私はメールの送り主のことを考えている時間がとて多くなっていた。

やっぱり誰なのか確かめてみたい。

もし、ケンジなのであれば、どうしてこんなに回りくどいやり方を
するのかわからない。

別れた恋人というのは、なかなか普通の友達に戻ることは難しいと
思う。

どちらかに、恋心が残っていた場合、すでにどちらかに新しい恋人
がいるのであれば、それこそ三角関係の
泥沼になってしまうだろう。

お互いが新しい恋人ができて幸せに暮らしていて、それでも友達と
して再会したいという気持ちのタイミングが合わない、別れても
お友達で・・・などというキレイな関係にはなれないだろう。

私は、思い切ってメールを送ってみた。

何日も考えた挙げ句、結局私がいちばん聞きたかったこと・・・「あなたはケンジですか？」と文字を入れ、目をつぶりながら深呼吸をして両手で送信ボタンを押した。

「はい。ケンジです。」

私は送られてきたメールを見て愕然とした。

そんなわけではない。この人は私が「ケンジ」という名前を出してしまったことをいいことに、その名前を利用しているだけなのだ。

「いたずらはやめてください。」

私がバカだった。相手にあえて自分から素性を明かすようなことをしてしまった。震えがくるほど後悔した。すると、メールが届いた。「怒っていますか？」

これは、どういう意味だろう。やっぱりケンジという名前を私が出したから茶化されてしまったのだ。

「いたずらはやめください。怒っています。もうメールもしないでください。削除します。」

私は、それだけを送って削除しようとした。すると「待つて！」というメール。

続いて「俺は本当にケンジですが、あなたのケンジは杉原ケンジですよね。」

杉原ケンジ・・・ケンジの名前だ。

やっぱり、この人はケンジを知っている。そして私のことも。かすかな記憶を辿っても、私はケンジ以外の

もう一人のケンジという存在を思い出すことができない。なんて返信をすればいいのか。私はこの前のメールで、自分のことをR I Eではないと嘘をついてしまった。しかし、あのときは仕方がない。

どこの誰かもわからなかったのだから。でも、このケンジは本当に私のこともケンジのことも知っていた。

「杉原ケンジとはお知り合いですか？私の知り合いのケンジがどうして杉原ケンジだとわかるのですか？」

すると、30分ほど時間があいて次のメールが送られてきた。

「あなたは、下北沢にある聖明学園に通っていましたよね。」
「やっぱり、私のことを知っている。それも20年近く前の私のことを。」

「だったらどうなんですか？私は下北沢の高校には・・・」と文字を打ちかけてやめた。

こんなところで嘘をついてもしょうがない。

実際この見知らぬケンジは、この何日かの間私にメールを一方的に送ってきたが、別にひどいことをされたわけではなかった。

私は、もうここからは正直になろうと心を決めた。

そうでもしないと、何も始まらないし終わらないこともわかっていた。

「はい。そうです。やっぱり、私のことを知っているんですね。」

「一方的に知っているだけです。高校生の頃、下北沢のホームにキーホルダーを落としましたよね。」

私は一瞬にして、そのときの光景を思い出した。

あれは、夏休みが始まる直前の期末試験の期間中だった。いつもなら学生がいない時間・・・お昼すぎくらいに、どの学校も同じ時期に試験があるので、その日は駅のホームに学生が溢れかえっていたのだ。

そんな中、私の学生カバンが誰かのものとぶつかって

カバンにつけていたサーフボード型のキーホルダーがはずれてホームに落ちてしまったのだった。

そのとき、一人の男子高校生がいきなりホームに降りて拾ってくれたことがあった。

でも、一瞬の出来事で私は顔も覚えていない。彼も・・・この人も私の顔など覚えていないくらいの一瞬のことだったはずだ。交わした言葉は「ありがとうございます」だけ。あまりの短い時間に私は電車が来るかも知れなかったそのときのことを心配する余裕もなかった。

このメールの相手は、あ那时的の人というのか。それなら、そのあと一度も会ったことがないはず・・・はずというのは、会ったことがあるのであれば、とっくにこの話が出ていてもおかしくないと思っただからだ。

その人がどうしてケンジの名前と私を知っているのか。そして、メールアドレスも。

「はい。もしかして、あ那时的拾ってくれた方ですか？それなら、どうして私のアドレスを知っているのですか？杉原ケンジのこともそして、あなたはなぜ自分をケンジだと言ったのですか？」

「杉原ケンジから、俺のことは聞いていませんか？もう一人のケンジ。」

「聞いていません。」

「だったら、チャンプという名前は聞いたことがありますか？」

チャンプ・・・チャンプとは、ケンジの同級生でケンジに最初にサーフィンを教えてくれた友達の名前だ。

チャンプという人は本当はケンジというんだ。知らなかった。みんながチャンプチャンプと呼んでいた。

そして、この私と同じアドレスの人が、まさにそのチャンプ。そのチャンプが、どうして私のメールアドレスがわかったのか？

「チャンプさんという名前は聞いたことがあります。チャンプさんがあの時、駅のホームで落し物を拾ってくれた方なのですか？それが、どうして私だとわかったのですか？」

「すみません。ケンジが波乗りをやめたと聞いてずっと気になっていました。とにかく、そんなお話をしたいのですが、今度食事でも行きませんか？いきなりですけど。」

「私はチャンプさんの顔を知りません。そんな顔も知らない人と、どうやって待ち合わせをして食事するのでしょうか。どこかに、目印に赤い服でも着て立っているとしてもいいのですか？」

「それでは、いけませんか？」

それでは、いけませんかって・・・出会い系サイトのように私は嫌だった。

すると続けてメールが来た。

「大丈夫です。俺が顔を知っていますから。」

そうだった。チャンプは私の顔を知っている。

私は、少し怖い気もしたが、このチャンプという人に、まったく見ず知らずの人でもなさそうだというほんの少しの安心と、ケンジのことについて話をしたいというところから、会ってみることにした。私のアドレスをどのようにして知ったのかも知りたかった。

それと、思い込みとはちょっと違うけれども、私はチャンプが悪い

人ではなさそうだということだけは、メールのやりとりの中で直感的に感じていた。

「わかりました。土曜日の昼間ならいつでも大丈夫です。」

「了解！では、次の土曜日までに連絡します。あっ！言い忘れてました。俺の名前は岡庭ケンジです。」

第3話 ケンジとの出会い

私とケンジが知り合ったのは、高校2年の時だ。
私の友達ナオミと、その彼が、私たちを引き合わせた。

「RIEのこと気に入っている人がいるのよ。会ってみない？」と、
ナオミが私の顔を
覗き込みながら、少し（お願い！）という気持ちが彼女の瞳から感じ取れた。

ちょうど、そのころ、私は見事にサーフチームの先輩への片思いが
ブレイクしたばかりで、

この、なんともいえない敗北感をどう自分でも受け止めていいのか、
そして、どう浄化さ

せたらいいのか毎日悶々としていたのだった。

「気に入ったって、いったいどこで私を見たの？」

「駅・・・だって聞いているけど。」

「駅って・・・ホントにそれ、私なの？」

「絶対間違いないよ。日焼けしてて、一人だけ制服に白いソックス
はいている子って言うて

たから、RIEしかないでしょ？」

白いソックスと言われてしまえば、確かに校則違反のソックスをは
いているのは、私だけ
かもしれない。

「そうなんだ・・・」

興味があるような、ないような。正直なところ別にどっちでもよか
った。

そんな私の気持ちより、ナオミは頼まれた手前、なんとか私とその

人を会わせようと必死

だった。

「彼もサーフィンをやっているらしいの。一緒にサーフィンに行く
ということ、まずは

友達からさあ、会ってみない？」

「サーフィンお見合いツアーですか？」

「まあ、そういうことになるかな。」

「いきなり二人で？いきなりサーフィンに行くよりも、それならま
ずご飯とかお茶とか、

普通そういう流れじゃない？」

「それがさあ、プロサーファー目指していて、海に行く以外全然街
に出たりしないらしい

の。そんなお金使うくらいなら、一回でも多く海に行ったほうがい
いって。」

私は、勝手に無口でぶっきらぼうな人を想像していた。

「で、そんなに遊んだり出かけたりしない人が、私を気に入った
て、どうやって会った

り遊んだりすればいいわけ？デートは毎回海ですか？」

私は、少し呆れ気味に聞いた。本当に、そんな彼が私を入った
などと言うのだろうか。

そして、気に入ったからどうというのだろうか？

「サーフィンおたくなのよ。かつこいいんだけど、サーフィンに異
常に執着していて、

いい人らしいんだけど、ちょっと近寄りがたいんだって。彼女がで
きたら変わるんじゃない

ないかって彼が言うのよ・・・」

「それで、私に？それって私は爆弾処理班ってこと？」

「そういうつもりはないけど、そうなっちゃうかなあ？でもね、彼
がRIEのことを気に

入ってるっていうのはホントみたい。」

「じゃあ、一回お茶だけしてみるわ！あとは、どうなっても知らないから！」

そして、ナオミとナオミの彼と私とそのサーファーの彼との4人で、渋谷の公園通りにある

喫茶店で会うことになった。

「はじめまして。RIEです。」

私は微笑みながら、軽く頭を下げた。

「はじめまして。杉原ケンジです。」

これが、私とケンジとの出会いだった。

彼は、私の想像していた人とは全然違い、一見ハーフかと思わせるような顔立ちをしていた。

普通にかっこいいと言われるであろう整ったルックス。少しブラウンがかった目が彼の目焼

けしている肌を余計に際立たせた。しかし、中身はというと、ナオミから聞いていた通りの

よく言えば個性的、悪く言えば・・・相当変わっている人だった。

「俺と付き合いたいのか？」

ずっと私たち三人の会話に入ってこないで、いきなり口を開いたと思えばこんなことを口走った。私たち三人は思わず顔を見合わせてしまった。あまりにいきなりの言葉だった上に、まるで私が彼と付き合いたいみたいな方向に話が進んでいる。

「おい！ケンジ！いきなりそれはないだろう？」

ナオミの彼が場を和ませるように、笑いながら話を変えようとした。「付き合いたいって言ったら付き合ってくれるのか？」

ナオミの彼の気遣いも無視して、私は彼に聞いた。ナオミとナオミの彼は、少し（まずいな）

という顔をしながらも、こちらを見守っていた。

「条件がある。」

「いったいこの人はなんてことを言うのだろうか？気に入ったと言って

きたのは彼のほうだ。それ

なのに、自分と付き合いたいのかと私に聞いてきて、おまけに付き合いたいなら条件があるだ

なんて、いったいどれだけ高飛車な人なのだろう？最初に聞いたちよつと近寄りがたいという

意味がすぐくわかった気がした。

「条件？なにそれ？」

私も、少し無礼なこの初対面の人に同じように少し無礼気味な言い方で返した。

「校則を守らないヤツは嫌い！」

「えっ？」

私は、ナオミとナオミの彼のほうを見て（なんなの？この人？）という顔をした。

「そんなに目立ちたいの？」

「えっ？」

「キミさあ、あの子ならすぐやらせてくれそうって、いろんな男子から言われているの知ってる？」

「えっ？なにそれ？」

「自分のことって自分がいちばんわかっていないものなんだよね。きつと俺もそう。だけど、

キミには誰もそんなこと言わないでしょ。それを言ってあげられるのは俺しかいないって思ってたから。」

「それって、大きなお世話だよって言ったら？」

「俺は、他人から、やらせてくれそうだから付き合ってたって言われたくないからさ。だから、俺と付き合うんであれば制服くらい普通に着たら？一緒にいても目立ってしょうがないよ！」

自分だって、しゃべらなければ、ものすごく軽そうで、遊んでそうな感じに見えるよ・・・と言いたかったけれど、彼の言うとおり、自分のことって自分がいちばんわかっていないだろうから、きつと彼も私に言われても（そんなことはない）って思うだけだと思って

やめた。

この時点で、私は彼に少し興味を持っていた。確かに、今まで出会ったことがないタイプ。

校則を守って普通にしている私というのを、初めて想像してみた。でも、想像できない。未知の世界。そして、私はその想像できない私の姿というのを見てみたくなってしまったのだ。

「制服、普通に戻してみようかな・・・」

その言葉に驚いたのはナオミとナオミの彼だった。それは、私が普通に目立たない女子高生に

なるかもという驚きではなく、（付き合うんだ！）ということへの驚きだった。

「とにかく、また会おうか？」

「そうだね。」

これだけだった。付き合うとか、よろしくお願いしますとか、そんな言葉もなく、また会おう

か？そうだねで、私とケンジは始まった。

付き合ってから、私たちって・・・という関係？「みたいな話は一切なかった。そして、別れる時も。まさか、この日から私とケンジは15年間も一緒にいるなんて誰が想像した

だろう。なんの音もたてずに風が通り抜けていくように、私とケンジはふたりになって、そして、何も言わずに別れた。

今、考えれば、私はケンジに慣れすぎて、ケンジの本当のやさしさに甘えていたのだと思う。そのために、ケンジのことを思いやる気持ち、長年付き合っていくうちにすっかり忘れてしまっていた。

最後は、ケンジのわがままに付き合いきれなくなって別れたが、あれは、わがままではなく、ケンジが抱いていた孤独を私が分け合えなかったただけなのだ。

人は誰でも孤独だ。それも、ひとりでいるときより、誰かと一緒にいるときのほうが孤独を感じる。ふたりでいても、どうしてもひとつにはなれない。当たり前なのだけれど、ひとりでいるときよりも、

ふたりでいるときの方が、決してひとつにはなれないもどかしさを感じてしまうものだ。ケンジは今どうしているだろう。幸せに暮らしているなら、それでいい。少し嫉妬してしまうけれど。私は、ケンジに何も気持ちを伝えずに黙ってケンジの前から姿を消した。

いまさら、気持ちを伝えることなどできないし、伝えたところで、どうにかなるわけでもない。でも、元気にしているということだけは知リたかった。元気でいてくれればいい。そんな

思いが、私にケンジへ匿名のメールを送らせたのだった。

そして、付き合っている間、いつもケンジは自分に波乗りを教えてくれていた人の話をしてくれた。あの性格からか、波乗りばかりをやっていたせいか、あんまり友達らしい友達がいなかったケンジが唯一心を許せた友達だったのだろう。そして、ケンジはサーフィン雑誌を買ったたびに、いつも後ろのほうのページの大会での表彰コーナーで、彼の名前を探していた。

「また出てるよー！すげーなあ・・・チャンプ。アイツだけは、本当にプロになっちゃうかも

しれないなあ・・・」

チャンプが載っているたびに、いつも目を細めながら表彰のページを眺めていた。

「どれ？チャンプって？写真は載ってないの？」私は聞いた。

「載ってるよ。ほら！」

そう言ってケンジが見せてくれたページは、表彰台の上でウエットスーツのまま片手に持ったトロフィーを持ち上げている日に焼けた笑顔と、ライディングの写真だった。

表彰台の笑顔は、肌の色が黒すぎて顔が判別できない。ライディングの写真も横顔だった。そして、写真のうえには、「優勝：チャンプ」といつも書いてあって、私はチャンプもケンジと
いう名前だったなんて知る由もなかった。

「言い忘れてました。俺の名前は岡庭ケンジです。」

チャンプからこのメールをもらって私がどんなに驚いたことか。

岡庭憲二プロ・・・ケンジの唯一の心を許せた親友が、私とケンジが別れてからのこの10年近い時のあいだにプロサーファーになっていた。それも、今や日本を代表するトッププロ。世界選手権にも出場している数少ない日本のトッププロだ。彼のライディングは、芸術の域に達しているといっても大げさではないだろう。実際、彼がシリーズで出している「岡庭憲二のサーフィン紀行DVD」は予約していないと購入できないほどの人気ぶりだ。

そして、岡庭憲二といえば、「ALWAYS WIDE OPEN」
。岡庭憲二の、どのDVDにもその言葉がパッケージに記されてあった。

私が好きなのは「サーフィン紀行〜HAWAII編〜」。そこには「ALWAYS WIDE OPEN HAWAII NALU」というサブタイトルがついていた。私は、その言葉を自分のメールアドレスに使ったのだった。そして、その本人のメールアドレスも同じ。それだけだったら何の不思議もないが、どうして、そのアドレスの主が私だとわかったのかが不思議だった。

そして金曜日の夜、1件のメールが受信された。

岡庭憲二からだった。

「チャンプです！明日の夜6時半に、渋谷のモツ鍋の店を予約しました。大丈夫ですか？」

私もチャンプからのメールを待っていた。やっと明日会える。そして、どうして私のメールアドレスがわかったのかやっと聞ける。そしてケンジのことについても。

「大丈夫です。場所がよくわからないのですが、どこに行けばいいですか？」

「ハチ公の前はどうですか？人が多すぎてイヤかなあ？」

「わかりました。あの・・・私、赤い服を着ていったほうがいいで

すか？（笑）」

「ハチ公にまたがって待つてくれればわかります（笑）」

私は、メールを見て思わず笑ってしまった。

チャンプが岡庭憲二だとわかった以上、もう私もチャンプの顔を知っている。

私が冗談で、赤い服と言ったら、彼もハチ公にまたがってなどと冗談で返してきた。

そのおもしろさが、「やさしさ」という言葉に形を変えて、私の心の中にずっと入ってきた。

（ケンジには、こんなにユーモアがあってやさしい友達がいたんだね・・・）

そう思うと、なんだか私も幸せな気分になって眠りについた。

第4話 永遠に言えない・・・

私は、岡庭憲二に土曜日の昼間なら空いていると返事したのは、日曜日に海に行くために

土曜日はなるべく出かけないようにと、波乗りを始めてから過ごしていたからだった。

結局、憲二が予約を取った店が夕方からだったということもあって、私は土曜の夕方という

いちばん混んでいるであろう時間に、渋谷の八チ公前で憲二と待ち合わせをすることになった。

「RIEさんですよ。」

そう言つて声をかけてきた憲二は、DVDやサーフィン雑誌で見たとおりのさわやかな感じのする人だった。

「はじめまして。あの、こんなに人が多い場所に出没したりして大丈夫なんですか？」

私は、憲二を、岡庭憲二という一人の有名なプロサーファーとして気づかった。

「大丈夫ですよ。サーフィンの世界では顔が売れているかもしれないですけど、そうじゃない

人たちにとっては、ただのオッサン・・・いや、お兄さんですから。

「

そんなもんなんですかね。」

この笑顔。そして声のトーン。そして、人なつっこい雰囲気。この人のことを第一印象で、感じ悪いと思う人はいないだろう。

自分から、あまり人に話しかけていけないケンジが、きつとこの人には気を使わないで話かけ

られたのかもしれないと確信した。

「あの、敬語はやめませんか？って言いながら、こんな聞き方したらおかしいですよ。」

「そうですね。・・・なんてお返事してもおかしいですよ。」
そう言いながら、二人は憲二が予約したモツ鍋屋へと向かった。

憲二が予約したお店は、若くてイキのいいお兄ちゃんたちが元気よく楽しそうに接客をして

いる店だった。どの従業員も仕事が楽しくて仕方のない様子。居心地もいい。そして、私たちは個室へと案内された。

「早速だけど、いちばん聞きたいことはメールアドレスのことだね。」

いきなり真面目な顔をして本題に入った憲二に、私は少し驚きながらも、憲二の誠実さを感じずにはいられなかった。

「はい。あつ！でも、今はどうでもいいって言ったら嘘になるけど、私のメールアドレスだと

知っててメールをくれたんでしょ？」

「もちろんそうだけど。」

「それより、ケンジとは、最近も会っているんですか？ケンジが波乗りをやめたということを知

知っていたから・・・」

「今は、もう会ってないよ・・・」

そう言つて、憲二は少し顔を曇らせた。そして、

「何から話さなければいけないかな・・・」と言つて憲二はしばらく黙っていた。

私は、なんとかしてこの沈黙を破らないといけないという気持ちになつた。

私が聞きたいことを言うために、憲二はわざわざ時間を作ってくれたのだから。

「なんでもいいです。っていうか、何を言われてもいいって言った

ほうが正しいかな。」

「それなら、高校生のころから今までの話をしようか・・・」
そう言つて、憲二はゆっくりと話はじめた。

「まず、下北のホームに落としたキーホルダーのことだけど・・・」
「そこまでさかのぼるんだあ！」

あの時、一瞬のあいだにホームに降りてキーホルダーを拾ってくれた人が今、目の前にいる。

きつと、こういう運命だったのだ。あの男子学生ともいつか出会える運命。

「あれはね、俺がケンジにハワイのおみやげに買ってきたものなんだよ。」

「ふたつですよ。ケンジからおそろいでつて渡されたから。」

「そう。ひとつあげたら、彼女ができたつて言うから、じゃあ俺のもあげるよつてふたつ渡した。だから、あのとき下北の駅のホームで君を見つけたというより、俺は学生力バンについて

いるキーホルダーを見つけたんだ。そしたら、誰かとぶつかってキーホルダーが落ちたじゃない。自分のものが落ちたような気分になつて、気がついたらホームに降りて拾つてた。」

「そうだったんだあ。」

「それで、拾つたあと、これがケンジの彼女だつてわかつたわけ。」

「でも、キーホルダーなんていくらでもあるでしょ？」

「普通はね。でもあれは特別。ハワイのハレイワのショップで特別に作つてもらつたものだから・・・ALWAYS WIDE OPENつて書いてあつたの気づいてた？」

「全然気づかなかつた。」

「俺がいちばん大事にしている言葉。いつも全開つていう意味。」

「それを、ケンジにおみやげにくれたんだあ。二人のケンジのものだつたのにね。なんだか私もちやつて悪かつたかも。」

「いいよ！いいよ！俺だつて、あのケンジにまさか彼女ができるなんて思つていなかったし、彼女できたんだつて言つてたケンジが、

あまりにもうれしそうだったしね。」

「それで、キーホルダーから私が彼女だってわかったと・・・」

「そう！それとね、君、1ヶ月くらい前に下北のハチベイっていう居酒屋にいなかった？」

ハチベイも、このモツ鍋屋と同様、店内は活気でちよつとうるさいんだけど、従業員がすごくよくて、私がよく使っている店だった。最近、飲みに行くなら、ハチベイって決まってるけど。もしかして、いたの？」

「うん。すぐそばの席で友達と飲んだ。」

「それで、どうして私がわかった？」

「だって、高校生のころから顔変わってないから。」

私は返事に困ったけれど、おかしくて笑った。顔が変わらないからすぐわかるってよく言われる言葉だった。すると、憲二は、

「そのとき、余計なこと聞いちゃったんだよね。って言うか、あんなに大きな声で話しているんだもん、俺じゃなくても聞こえちゃうよ。」

「そんなに大きな声で話してた？」

「うん。大きな声で、アドレス変えちゃったの〜！岡庭憲二のDVDのタイトルからパクって英語とハワイ語ミックスさせちゃったって言ってたよ。それで、たまにだけケンジにメールしてるって、これ内緒ねって言ってたよ。」

そうかもしれない。いや、そうだ。間違いない。私は、ハチベイでそんなことを言いながら、友達に新しいメールアドレスを教えた。た。

「それで、どうして私にメールを送ってきたの？・・・今だから言うけど、私、私だってわからないようにケンジにメールを送ってたの。」

「知ってるよ。」

どうして？それなら、ケンジも私からのメールだってわかってたのか。私はなんということをしていたのだろう。ケンジはきっと迷

惑だったにちがいない。ケンジの前から突然いなくなった私からのメールなんて。

「なんであなたが知ってるの？ケンジも知ってるの？」

「ケンジは知らない。俺だけ。．．はい、これ。」

憲二はそういつて携帯電話をテーブルの上に置いた。

「何？これ？」

「ケンジの携帯電話。」

「どうしてあなたが持っているの？」

「．．．．．」

「なんであなたがケンジの携帯電話を持っているの？」

「．．．．．ケンジの遺留品。」

「どういうこと？」

「ケンジ．．．ハワイにいるんだ。一緒に海に入っただけ、帰ってこない．．．」

「帰ってこないって．．．」

「そういうこと．．．だから、君だけには伝えたくて俺も日本に帰ってきた。ケンジには、もう俺しかなかったのかもしれない。突然ハワイにやって来て、10年近くブランクあるけど、やっぱり俺の人生にはサーフィンが必要だって。日本でどこかの海に入っていて君に会うのが嫌だって。何も言わずに突然いなくなった君を許せてない自分が、君を忘れられないように嫌だって。だから、もう一回、若かったころみたいに最初からサーフィン教えてくれって。」

「それなら、どうして直接言ってくれなかったんですか？どうしてわざわざ誰だかわからないメールを送ってきたりしたんですか？」

「それは、君がまだケンジに想いがあることを知っちゃったから．．．」

「私、何も言っていないじゃないですか！勝手にそんなこと言っただけ。そんな大事な話なのに、私はずっといたずらメールだと思って気味が悪かったんですよ！」

「じゃあ、なんでケンジの携帯に波乗り情報なんて送ってたの？ケンジとの接点を作ってたんじゃないの？ケンジを忘れられないんじゃないの？ケンジが君と別れてからどんな想いでずっと一人でいたか考えたことはあるの？」

憲二の言うとおりだった。

私がケンジの前から突然姿を消したのは、ケンジとは自然消滅に持っていきたかったけれど、できないとわかったから逃げただけだったのだ。あのときも、ハッキリと自分の気持ちを告げるべきだった。自分は何も傷つかないで逃げた。付き合ってから別れるときって、振るほうがツライというただそれだけで、私は現実から逃げた。ずるい女だ。6年間も一緒に暮らしていながら。そして、自分が寂しくなると、誰だかわからない一方的なメールを送る。別れてから何年も経っているのに。

「俺も、日本に帰ってきて、どうやって君を探そうかと思ったよ。千葉にも湘南にも茨城にも伊豆にも行った。顔を見ればわかると思った。まさか、下北でまた会うとはね。それから、ケンジの携帯に俺と同じアドレスのメールが入ったから、すぐ君からだってわかったよ。でも、ケンジに未練があるっていうことも知っていたから、どうしても、ケンジのことは会って話したかった。」

「そうだったんですか・・・でも、帰ってこないって、どこかでまだ生きているっていうことも考えられ・・・ないですよね。」

私も、サーファーだ。これがどういうことかぐらいはわかる。

私は泣かなかった。現実逃避ではなく、信じられないというのでもなく、ただ、ケンジに会わなければ、いや、ケンジがいなくなった海に行かなければ何も終わらないと思ったからだ。泣くのは、すべてが終わってからでいい。私の想いとケンジの想いが浄化されたときにきつと泣けるのだと思った。

ハワイに行こう。ケンジがいなくなった場所に。会社も辞めよう。すべてを捨ててケンジと向き合えないと何も解決されないような気がした。

私は、すぐにも会社で退職願を出して、荷物をまとめてハワイに行こうと決めた。

そして、ケンジの帰りを待とうと思った。たとえ、その日が永遠に来ないとしても。ケンジが帰ってくるまで私は待つ。それが、私のケンジにできるたったひとつのこのような気がした。今度、もしケンジに会えたら、ハッキリと伝えよう。別れてからはずっとケンジを想っていたこと。そして、別れたことを後悔していること。それを、永遠に言えなくても・・・

「ハワイに連れてってください。」

私は憲二にそうお願いしていた。

「いいよ。一緒にケンジが帰ってくるのを待つ？」

「そうしていただければ・・・心強いです。一人だったら耐えられないかも。」

「ケンジの前でも、そうやっていればよかったのにね。アイツはいつも一人で頑張って、俺のことを全然頼らないって言ってたから。」

それが、余計ケンジに男としての自信をなくさせてたかもしれないね。」

憲二の言葉は、私の胸のあたりから、すうすうとお腹のあたりまで暖かいなにかが流れていくようだった。

「出発の日は君に任せるよ。俺はプロサーファーだけど、それだけじゃ食べていけないから別の仕事もやってる。世界中どこでもできる仕事。だから、俺のことは気にしないで、君もそれまでいろいろ大変だろうから、しっかり準備して！」

「わかりました。じゃあ、ケンジが帰ってくるまで、私のこと、よろしく願います。」

そういつて、私は頭を下げた。誰かに頼って生きていく・・・今まで考えたこともなかったけれど、そんなに悪いものでもないかもしれない。頼りきって生きていくのは、どうかと思うけれど、一人で冷たい海に入っていくより、そつと差し伸べられたボートと一緒に

乗ってみるのもいいかもしれない。

私は、ケンジがなにも差し伸べてくれていないと思っていたけれど、もしかしたら、ケンジの差し伸べてくれていたボートに気づかなかっただけなのか、それとも、それを見ることができる心の眼を持ち合わせていなかったのかもしれない。

16歳のあのとき、駅のホームで憲二が拾ってくれたキーホルダー。そして、あれから20年ほどたった今、また憲二が私の大事なものを拾い集めてきてくれた。

これから、ハワイに行くことというのは、私がいちばん聞きたくないことを聞くかもしれない。それと、いちばん見たくないものを見ることになるかもしれない。

それでも、この憲二の渴きのない溢れ出るやさしい笑顔があればなんだか乗り越えていけそうな気がする。そして、人間として少し大きくなれそうな気もしていた。

私は、次の日には海には行かず、いらなと思うれる部屋の荷物を捨てて、生きていくための最小限のものだけを残した。そして、退職願を書いた。

最終話 24th Summer Breeze

ノースシヨアへ向かうフリーウェイを下りて、道なりにまっすぐ走っていくと、海へと続く道に出る。その脇にはずっと、ただっ広いパイナップル畑が広がっていた。

丘の頂上まで行くと、遙か向こうに海が見える。空と海の色が溶け合うような青が広がり、太陽の光りが波に反射する・・・ノースシヨアの海だ。

昔観たサーフィン映画の場面を思い出させた。

憲二の白いアメ車が、もうすぐ40歳だというのに、日焼けして、ビキニの上にタンクトップ一枚という格好の私を乗せて、パイナップル畑の真ん中の道を通り過ぎる。

「ケンジ、私も来ちゃった。」

私は、声に出して言ってみた。

10年ぶりに、ケンジに話かけた。それが、なんだかとてもうれしくなったけれど、余計に話しかけた相手がいないことが私を必要以上に虚しくさせて、泣きたくなった。

ケンジが帰ってこなくなってから1ヶ月。

ノースシヨアの風は、私の震える唇をさらに揺さぶるように、私の顔をめがけて吹いていた。

ハレイワで右に曲がって、憲二の車はそのまま海沿いへと入っていた。

秋のノースシヨアは、日本の波とは比べものにならないくらいの大きさだった。

ざっと、人が三人、縦に積み上げられたくらいの高さはあるだろう。

「ケンジ、どうしてもここに来たかったんだあ。」私は、また相手のいない会話を声に出した。横で憲二が聞いているとか、そんなことはどうでもよかった。

さんざん、ケンジに話しかけていたあと、私はここへ来てはじめて憲二に話かけた。

「ねえ、演歌っぽいけど、なんだか漁師や船乗りの奥さんの気持ちがあった感じ。」

「何それ？おもしろいこと言うねえ。」

「憲二は波乗りしているときって何を考えてる？」

「波のことだよ・・・なんで？」

「そうだよ。私もそうだった。でも、今は違う。淋しかったり、余計な悪い心配しちゃいそうな気がする。ホントは、最初からこんな気持ちだったらよかったのにね。」

「そうか・・・サーファアの彼氏を持った女の子ってそんな気持ちだったのか。」

「私にもわからなかったけど。自分も一緒になって海に入っていたから。でもさあ、漁師なら

まだいいよね。魚を獲ってくるでしょう？ケンジなんか、何も獲って帰ってこなかった。憲二も同じか！でも、ケンジなんか何も獲ってこないどころか、ケンジが帰ってこなくなっちゃったんだから、本当に最悪。」

「ケンジがなんで波乗りをやめたか知ってる？」

「知るわけじゃない！」

「言ってたよ。やっと大人になれるって。自分は波をおりることでは大人になれないって。だから、R I Eばかり大人になって自分はずっと停滞してたって。それをR I Eが気づかせてくれたって。」

「ケンジにも、私に言えなかったことがあったんだ。お互いそんなことだらけだったんだね。」

私は、そんな気持ちでさえも、ケンジと分かち合えなかったことが

とてもくやしかった。

「ねえ、R I Eさあ、オシドリ夫婦って言葉知ってるよね。」

「知ってるけど、どういう意味なのか本当のところはよくわからない。」

「オシドリって、オスがものすごく派手で、メスがものすごく地味なんだよ。なんでだかわかる？」

「さあ・・・」

「オスがね、敵からメスを守るために、先に自分が目立つように派手にできているんだって。」

「それがどうかしたの？」

「ケンジが言ってた。彼女派手派手しくて嫌になるって。目立ってしょうがないって。きつとR I Eを守りたかったんだね。ケンジからその話を聞いて、すぐにオシド리를思い出したよ。」

ケンジは、私に「言わなくてもわかるだろ」が口癖だった。

私は、言わなきゃわからないよっていつも言っていたけど、ケンジが本当に言いたいことを汲み取ってあげられなかったんだなあと、いまさらわかった。

「ねえ、ケンジ帰ってくるかなあ。私、観光で来ているから長くてもう3ヶ月しかいられないよ。それまでに、帰ってくるかなあ。」

こんなことを言いながら、私は悪い予感を頭の中から拭えずにいた。渋谷のモツ鍋屋で憲二から初めて話を聞いてからというもの、ずっと心の中では悪い予感が、水面に石を投げたときにできる波紋のよう、ずっと広がったままだった。

「じゃあ、俺の仕事手伝う？」

「なんの仕事？」

「世界中どこにいてもできる仕事。それでいて人に喜ばれる仕事。これがあるから、俺も世界中の海で波乗りができる。」

「そんな仕事、やらない人っているの？」

「そりゃあ、いるよ。やるやらないじゃなくて、わかるかわからないかっていう仕事だから。」

「私はやりそう？じゃなかった。わかりそう？」

「どうだろうね。でも、おもしろいかもよ。」

「でも、まだ3ヶ月あるし。それまでにケンジが帰ってこなかったら、考える。」

「いつでもいいよ。やりたくなったときに始めればいいから。」

それから、1週間もたたないうちに、ポイントから何キロも離れた岩場に、ケンジのサーフボードが、リーシュコードだけが切れて打ち上げられた。

持ち主のいなくなったサーフボードに、憲二の知り合いのハレイワのシヨップのオーナーが、赤いアンセリウムの花を供えてくれた。

私は、その一部始終をまるで他人ごとのようにながめていた。

その日は11月のノースにしては珍しく波の音が静かだった。

「もう、ここにいる意味なくなっちゃったね。」

私は憲二に言った。

「そうかなあ？世界中どこにいてもできる仕事の話、まだ返事もらってないよ。あと、まだ、RIEの波乗りの腕も見せてもらってない。」

「そんなたいしたものじゃないよ。下手の横好きってやつ。」

「それと・・・いい加減泣いちゃえば？泣かないとね、浄化されないんだよ。涙はね、心の中の嫌なことをすべて流してくれるから。」

私は、サンセットビーチに向かった。

ブルーのようなエメラルドのような、こういうブルーをなんと呼ぶのだろう。

どこまでも続いている海岸線。いたるところで波が白くブレイクしている。

ケンジは、この波にもまれながら、何を思っていたのだろう。最後に誰の名前を呼びたかったのだろう。そんなことを考えながら、私はひとりで砂浜に座り込んで泣いた。砂をつかみながら大声で泣いた。もっと、やさしくすればよかった。もしも、今、ケンジがこの海で大ケガをして、起きることさえできなくなったとしても、私はケンジとずっと一緒にいただろう。

「今日は波が静かだよ」とか「今日はいつもより太陽がまぶしいよ」なんて言いながら、毎日をケンジと一緒に生きただろう。

一生波乗りができなくなってもいい。季節がずっと冬でもいい。それでもケンジがいれば私はこの人生を楽しみながら生きていけただろう。

「お願いします。誰か私に生きていくための力をください。お願いします。」

私はそう言って力の限り祈った。自分のなかに、まだこんなパワーが残っていたなんてびっくりするくらい。

ケンジとサーフボードを結んでいたリーシュコードは、どこからも出てくることはなかった。

けれど、私とケンジが一緒にいたという事実は、決して消えることがない。時がたって色あせることはあっても、思い出は永遠だ。いくら季節が過ぎていっても、ふたりが一緒にいた時間は永遠に残る。

「また来るね、ケンジ」

私はそういつて、またパイナップル畑の道を、今度は街に向かって戻って行った。

「いろいろお世話になりました。」

憲二にお礼を言って、私は日本へ帰るための荷造りをした。

「いただけていいよ。次にタヒチに行くけど、一緒に行く?」

私に気づかってか、憲二はいつもやさしい言葉をかけてくれる。

「大丈夫だよ。ここは、あまりにケンジに近すぎて寂しすぎるから・・・」

本当にそうだった。あんなに憧れていたノースショアを見るのも、今の私には苦しさが伴う。

また、つらくなったら、ここへ来ればいい。ケンジは、もうずっとここにいるのだから。淋しくなったら、ケンジのいる海に抱かれに来る。そして、これから人生を頑張っ、私も最後はケンジの海に帰ってこようと思う。

「ケンジが言っただ。いなくなる日の前の晩。この先、自分に何かあったときには、RIEのことを探してくれっ。それで、RIEの力になってやって欲しいっ。自分もずっと俺に世話になりっぱなしだったけどっ。だから、探したんだけどな・・・」

そう言っ、憲二は笑った。久しぶりに見たプロサーファー岡庭憲二のさわやかな笑顔だった。

「ケンジは自分がもしかしたらいなくなるかもっ、わかっていたのかな？」

「そんなことは、ないだろうけどな。」

「そっか。じゃあ、迷惑じゃなければ、いられる間だけ、ここにいさせてもらおうかな。」

「まだ時間がたっぷりあるから、ゆっくり考えな。」

「ありがとう。そうする・・・」

「日本に帰る日、もし、ダブルレインボーが空に架かったら、人生を俺に甘えてみるってのはどう？」

「それっ、どのくらいの確率の賭け？」

「自然相手だからねえ・・・0か100ってとこじゃない？」

「そんなんで、人生決めちゃっていいの？」

「その虹、きつとケンジが架けるよ。架からなかったら、RIEは大丈夫。一人で生きていける。もし、架かったら、ケンジがRIEをよろしくっ、とことだと俺は思う。」

そして、日本へ帰る日。

ホノルル空港へ向かう車の中から、私と憲二はダブルレインボーを見た。

これから、どうやって生きていこう。

憲二は別に何も考えずにただ毎日を楽しく過ごせればいいんじゃないと、またさわやかな笑顔で言っている。

そして、憲二と一緒になら、本当に毎日をただ楽しく過ごせそうな気がしてくるから不思議だ。

このダブルレインボーはケンジが架けたの？

私がどうやって生きていけばいいかの答えをケンジが出してくれたの？

ケンジのことをなくしてしまったから、いいことだけを思い出すのかな？

こんなことをしていると、また本当に大切なものを見逃してしまうかな？

「さて、ダブルレインボーだね。決まったね。ケンジが架けたんだね。ケンジがR I Eを、ここに残したがつているね。」

「そうかな？私はただ憲二に迷惑かけたくないだけなんだけれど・・」

「俺は、ケンジが落としたものを拾う役割みたいなものかもね。」

「落としたものを拾う？私、ケンジに落とされたわけ？」

そう言っつて、二人は久しぶりに笑った。

もうすぐまた夏が来る。

駅のホームで憲二にキーホルダーを拾ってもらってから、24回目の夏が来るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3600d/>

24th Summer Breeze

2010年10月21日06時08分発行